

[シンポジウム]

「語用論からの提言」 ——語用論から何が提言できるか——

概要

高原 脩

今日、広範な学際的研究に関わる多様な言語研究のパラダイムが著しい進展を見せてきている。国内では、ここ数年の間に「英語学の新時代—方向の模索と提言」(『月刊言語』2001年2月号)、「21世紀の日本語—何を捨て、何を残すか」(同2001年1月号)、「21世紀の日本語研究」(『国文学・解釈と鑑賞』2001年1月号)、「形式文法と機能文法」(『日本語学』2003年9月号)などの特集記事において、様々な論議や提言が見られる。また、国外では、*The Semantics/Pragmatics Interface from Different Points of View* (K. Turner(ed.), 1999)、異なった言語理論モデルの研究者との対話と意見交換を行い、これまでの linguistic thought を振り返り、21世紀における言語学の新たな方向を展望することを目的に開催された国際言語学会議(ギリシャ・アテネ大学2001年11月東森討議者による報告)や *Perspectives on Dialogue in the New Millennium* (P. Kühnlein, et al.(eds.), 2003) などに見られるように、世紀の節目にあたるこの時点で、これまでの言語研究の発展段階と動向を眺め、21世紀の言語研究のあり方についての見通しを得ることは意義深い。

そのような状況の中であって、昨年のシンポジウムでは、語用論の領域の中で一つの大きな柱となりつつある Relevance Theory をめぐり、Speech Act Theory, Cognitive Linguistics の立場からの提言がなされ、多くの有益な成果が得られた。今日の Relevance Theory の隆盛を見るにつけ、1990年 Barcelona で開催された IPrA Conference では、この理論の研究発表の session は一つしか見られなかったことが想起され、隔世の感を覚える。

本シンポジウムでは、前回のシンポジウムの流れをさらに引き継ぎ、数ある言語研究のアプローチの中で、人間の意味解釈の営みとも言われる「認知」の諸相を扱う有力な理論として広く注目され、多くの優れた成果を挙げつつある認知言語学、概念意味論、関連性理論、新グライス学派、およびモダリティで扱われる言語事象を取り上げた。各講師がそれぞれのアプローチの特性を紹介した後、論点をいくつかに絞り、問題点の提示・分析が行われ、語用論の立場から提言がなされた。

まず、小泉講師は、概念と表現の内的表示を連結する特別な認知体系である意味構造を概念と空間に区別し、移動と状態で意味分析を行うジャケンドフの概念意味論の7種の存在論的カテゴリーの紹介を通し、この理論への speech act 適用の可能性を示唆した。次に、ラネカーの認知文法における直示を取り上げ、そこで用いられる ground (基盤) という用語を検討し、その内容と話し手と聞き手双方の関係を明確にする直示体系の構造を整備し、より詳細な意味分析の必要性を主張した。

次に、見玉講師は、語用論における「一般的会話上の推意」(GCI) の役割を解明すべく、意味の分析をめぐる新グライス学派と関連性理論を比較し、推意を含むその分析のあり方について、1) 文と発話を対象とする分析においてもコードを設定すること、2) 言語現象を説明するために原則や規則のあり方を見直すこと、3) 意味分析の対象を文から discourse に拡大すること、という提言を行い、関連性理論に見られる問題点を指摘し、GCI Principles の優位性について明快な議論を展開した。

さらに、澤田講師は、モダリティの多義性/単義性について、1) 多義性分析による英語法助動詞の意味体系の意味解釈上の役割、2) ラネカーによる認知言語学的アプローチの主体性/客体性の概念による仮定法の法助動詞の意味解釈、3) パパフラゴウによる単義性の意味規定、の3点の問題を提起した。主として、仮定法条件文の帰結節に現れる法助動詞 could の意味解釈に焦点を当てつつ、興味深い例証により、could は認知的と根源的のモダリティであること、モダリティは、ラネカーの主張とは異なり、すべてが主体的であるとは限らず、客体的な場合もあること、そして主体的な認知的モダリティは認めるべきであるとし、モダリティの多義性分析の役割の重要性を主張する示唆的提言がなされた。

最後に、討議者として東森講師から詳細なハンドアウトにもとづき、各講師の発表について問題点の指摘と的確なコメントがあった。時間不足のため、新たな Lexical Pragmatics の展開と認知言語学での lexicon の扱いとの関係や関連性理論と coherence relations をめぐる問題などについてのコメントが何えなかったのは残念であった。しかし、討議者が国際会議に出席の折、同席した本シンポジウムに関係する理論の何人かの研究者と問題点について交わされた personal communication が引用され、また関連性理論の新たな展開などが付記されたのは大いに参考になるものであり、有益であろう。

質疑応答に入り、関連性理論の研究者からの反論も出され、佳境に入りかけたところで、時間切れとなり、十分なディスカッションができず、floor には不満が残ったのではないかと懸念される。また、提言された問題に対して、各講師の間で、さらにより多くの意見交換がなされていれば、一層実り多きものになったと思われる。

言語研究において、形式と機能は、車の両輪 (高見 2003)、貨幣の裏表、解剖学と生理学 (Peng 1981) などに喩えられるように、両者が必須のものであることは言を俟たない。本シンポジウムでは、単に、形式と機能の一般的関係の見直し (田窪 2003) に止まらず、いくつ

かの興味深い言語事象の問題点について、各講師から独自の適切な見解が披露された。また、それぞれの立場から、平明な解説と精緻な分析により、深化させた高度な論究と語用論研究の有用性が示され、有意義なシンポジウムとなったことは喜ばしい。そこで扱われた語用論研究の視点が、今回取り上げた言語研究の各アプローチに見られる問題点の解明と今後の言語研究の進展の一助となることを期待したい。

参考文献

- 「英語学の新時代—方向の模索と提言」『月刊言語』(2001年2月号)20-91. 東京:大修館書店.
- Jackendoff, R. 1983. *Semantics and Cognition*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Jackendoff, R. 2002. *Foundations of Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Kühnlein, P., Rieser, H. and H. Zeevat (eds.) 2003. *Perspectives on Dialogue in the New Millennium. Pragmatics & Beyond New Series*, Vol. 114. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. 1. Stanford, California: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. 2. Stanford, California: Stanford University Press.
- Levinson, S.C. 2000. *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- 「21世紀の日本語—何を捨て、何を残すか」『月刊言語』(2001年1月号)20-81. 東京:大修館書店.
- Papafragou, A. 2000. *Modality: Issues in the Semantics-Pragmatics Interface*. Amsterdam: Elsevier.
- Peng, F. C. C. (篇) 1981. 『日本語の男女差』東京: The East-West Sign Language Association, I. C. U.
- Sperber, D. and D. Wilson 1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Oxford University Press.
- 高見健一 2003. 「機能的構文分析のすすめ—」[特集形式文法と機能文法]『日本語学』(9月号)52-62. 東京:明治書院.
- 田窪行則 2003「巻頭言・言語の形式的アプローチと機能主義的アプローチ」[特集形式文法と機能文法]『日本語学』(9月号)6-11. 東京:明治書院.
- 「特集21世紀の日本語研究」『国文学・解釈と鑑賞』(2001年1月号)1-203. 東京:至文堂.
- Turner, K. (ed.) 1999. *The Semantics/Pragmatics Interface from Different Points of View*. Amsterdam: Elsevier.